



Title	教材「鹿を犬にした話」考(1)
Author(s)	佐野, 比呂己
Citation	国語論集, 9: 81-100
Issue Date	2012-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7423
Rights	

教材「鹿を犬にした話」考 (1)

北海道教育大学釧路校准教授

佐野 比呂己

一 續文堂出版『高等学校 新国語三』

三淵忠彦の「鹿を犬にした話」は、『高等学校 新国語三』續文堂出版 昭和三十三年（一九五七）に所収されている教材である。したがって、「国語三」とあるから、高等学校三年生を対象として位置づけられているということになる。

この教科書は、昭和三十三年度（一九五八）から昭和三十六年度（一九六一）までの四年間、使用されている。ちなみに續文堂出版からはこの前後に教科書は出版されておらず、續文堂出版にとしては唯一の高等学校国語科教科書にあたる。

『高等学校 新国語三』の編集委員は次の五人である。

国語審議会会長

土岐善麿

国立国語研究所第二部長

奥水 実

日本歯科大学教授

清水重道

東京都立大泉高校教諭

志賀一朗

神奈川県立工業高校教諭 三浦鉄夫

土岐善麿は国語学者であり、歌人でもある。国語審議会の当時の会長をつとめ、戦後の新字、新仮名導入にも大きな役割を果たした。他に、学習指導要領作成に携わった奥水実、国文学者の清水重道、後に国士館大学で教鞭とることになる志賀一朗、昭和三十三年（一九五八）三月『故事・成語・諺の探求』（有朋堂 昭和四十一年（一九六六）十月）の著書がある三浦鉄夫の四人が名を連ねる。

『高等学校 新国語三』は、次のような単元構成がなされている。

● 國華学校 新国語 二單元表

單元名	教材名 (筆者名)	目標	活動
一 日本近代小説	日本の近代小説 (田村光夫) 日本の小説と西洋の小説 (生島遼一)	1 わが国の小説 外国の小説の性格について理解する。 2 近代小説の特色を理解する。	1 近代小説の特色を調べる。 2 日本の近代小説と西洋の小説との性格を比較する。 3 二つの論文の内容を簡筆書きにしてみる。 4 作品について知っていることを話合おう。 5 作者の経歴や作品の背景などについて調べ、発表しあおう。 6 それが一編をえらんで読後感を書こう。
二 小説と人生	草枕 (夏目漱石) 高瀬舟 (森鷗外) 高瀬舟 (読後感) (生徒自作品) たけくらへ (樋口一葉)	1 小説の理解と鑑賞能力を深める。 2 表現の相違点 主題の意図がわかる。 3 明治以後の小説の流れを理解する。	1 「雑説」を書きだし文になおす。 2 それぞれの作者について調べる。 3 陶潜の人生観を話し合う。 4 表現の相違を話し合う。
三 漢文	漢詩 帰去来辞 (陶潜) 雑説 (尊愈) 前赤壁賦 (蘇軾) 星と伝説 (野尻抱影)	1 古詩を理解し、その鑑賞力を深める。 2 辞賦の文体になれ、その理解を深める。 3 古代中国人の人生観を知る。	1 作者について調べ、話合おう。 2 作者の他の作品を調べてみる。 3 要旨をまとめる。
四 道話	金平糖の壺 (柴田燭翁) 実行 (福住正克)	1 教訓話話について理解を深める。 2 作者の人生観を知る。	1 作品について知っていることを話合おう。 2 表現の技巧について話合おう。 3 借家大将の一部を口語文に書きなおしてみる。 4 作者について調べる。
五 江戸文学	元禄文壇の三偉人 (藤井乙男) 馬方ニ舌 (近松門左衛門) 世界の借家大将 (井原西鶴)	1 江戸文学の性格を理解する。 2 特有な語彙や語法になれる。 3 作者の史的的地位を理解する。	1 作品について知っていることを話合おう。 2 表現の技巧について話合おう。 3 借家大将の一部を口語文に書きなおしてみる。 4 作者について調べる。 5 特有な語彙や語法を書きとめよう。 6 江戸文学の性格を研究し、発表しあおう。

<p>六 俳句の鑑賞と創作</p>	<p>近世俳句 (芭蕉・其角・去来 凡兆・丈草・許六・嵐雪 蕪村・一茶)</p> <p>現代俳句 (正岡子規・河東碧梧桐 高浜虚子・山口青邨・中村汀女 水原秋桜子・山口誓子 中村草田男・加藤楸邨 石田波郷)</p> <p>現代俳句鑑賞 (山本健吉 作品五句 (生徒作品))</p>	<p>1 俳句の味わい方を知る。</p> <p>2 俳句の形式や季題を知る。</p> <p>3 俳句の起源および変遷を理解する。</p>	<p>1 俳句数句をえらんで評釈を書いてみる。</p> <p>2 俳句を作ってみる。</p> <p>3 作った俳句を発表し、批評しあう。</p> <p>4 生徒作品について話し合う。</p> <p>5 俳人ひとりをえらんで調べ、発表しあう。</p>
<p>七 芸術の理解</p>	<p>ミカンの皮の意匠 (谷口吉郎)</p> <p>美と芸術 (井島勉)</p> <p>塔について (亀井勝一郎)</p> <p>彌勒菩薩を見る (生徒作品)</p>	<p>1 それぞれの文章の特色を理解する。</p> <p>2 芸術の見方を理解する。</p> <p>3 芸術と人生について理解を深める。</p>	<p>1 教材の内容をまとめてみる。</p> <p>2 芸術について話し合う。</p> <p>3 生徒作品について話し合う。</p> <p>4 芸術作品について感想文を作ってみる。</p>
<p>八 俳文</p>	<p>奥の細道 (松尾芭蕉)</p> <p>去来抄 (向井去来)</p>	<p>1 古典の紀行文を理解する。</p> <p>2 俳文の味わい方を知る。</p>	<p>1 奥の細道の一部を口語文になおす。</p> <p>2 旅の経路を図にかく。</p> <p>3 芭蕉およびその作品を調べる。</p> <p>4 芭蕉の生涯、逸事などをしらべ、発表しあう。</p> <p>5 俳諧について調べる。</p>
<p>九 国語の特質と変遷</p>	<p>国語の特質 (橋本進吉)</p> <p>国語の変遷 (湯沢幸吉郎)</p>	<p>1 国語の特質および変遷を理解する。</p> <p>2 国語について関心し愛情を深める。</p>	<p>1 国語の特質を簡易書きにしてみる。</p> <p>2 国語の変遷をわかりやすくまとめてみる。</p> <p>3 国語と生活について話し合う。</p>
<p>一〇 古今と新古今</p>	<p>古今和歌集</p> <p>新古今和歌集</p>	<p>1 和歌の鑑賞力を深める。</p> <p>2 それぞれの歌風の特徴を知る。</p>	<p>1 すでに知っている歌について話し合う。</p> <p>2 万葉集との関係を調べる。</p>

	<p>二 随想</p> <p>時間の審判 (天野貞祐) 鹿を大にした話 (三浦忠彦) 水仙 (鈴木大拙)</p>	<p>3 歌集の史的地位を理解する。</p>	<p>3 教員をえらんで評釈する。 4 二歌集を比較しながら表現の相違を話さろ。</p>
<p>三 上代の文学</p> <p>古事記 大和国原 (武田佐吉) 万葉集</p>	<p>1 随想の読み方になれる。 2 随想の表現方法を知る。 3 筆者のものの見方、考え方を理解する。</p>	<p>1 随想の読み方になれる。 2 随想の表現方法を知る。 3 筆者のものの見方、考え方を理解する。 4 古事記の文体、万葉の歌体の特色を理解する。 5 特有の語彙・語法および万葉仮名がわかるようになる。</p>	<p>1 古事記・万葉集で知っていることを話さろ。 2 古事記・万葉集について調べろ。 3 神話・伝説について話さろ。 4 万葉歌人ひとりを選らんで調べてみる。</p>
<p>三 マスーコミュニケーションと言語 ニケーション と言語生活 心理 (南博)</p>	<p>マスーコミュニケーションと言語生活 (西尾実) マスーコミュニケーションと生活 心理 (南博)</p>	<p>1 マスーコミュニケーションにおける言語の役割を理解する。 2 マスーコミュニケーションの心理的影響について理解する。 3 マスーコミュニケーションの現代的意義がわかるようになる。</p>	<p>1 マスーコミュニケーションについて意義・種類・効用などについて話さろ。 2 マスーコミュニケーションの功罪について簡潔書きにしてみる。</p>
<p>四 漢文</p> <p>大学 中庸 語録 日本漢文 中国の古典 (吉川幸次郎)</p>	<p>大学 中庸 語録 中国の古典 (吉川幸次郎)</p>	<p>1 大学・中庸の思想や語録の性格を理解する。 2 中国古典の意義と価値を知る。 3 日本人に古くから親しまれた中国の文学作品とその日本文学への影響を知る。</p>	<p>1 既習の範囲で中国文学についての感想文をつくる。 2 漢字学習の成果について話さろ。 3 漢文と人生について考え発表しあろ。</p>
<p>五 近代劇の鑑賞</p> <p>人形の家 (読後感) (生徒作品)</p>	<p>人形の家 (イブセン) / 竹山道雄 人形の家 (読後感) (生徒作品)</p>	<p>1 近代劇の味わい方を知る。 2 戯曲の構成および主題について理解する。</p>	<p>1 戯曲の全編を読んであらすじを短くまとめる。 2 作品について特に感だところを話さろ。 3 生徒作品について話さろ。</p>

六 高校生活 を終える 新たに就職する若い人々へ	クラブ活動の意義 (生徒作品)	1 卒業にあたって学校生活を反省する。 2 卒業後について考える。	1 学校生活の反省という題で文をつくる。 2 学校生活を反省し、話し合う。 3 将来の希望を生きがいについて話し合う。
七 文法 文の構造 参考 まぎれやすいことば	名詞・副詞・連体詞・感動詞	1 文の構造について理解を深める。 2 文語文法の知識を整理する。	1 教材中の文章を例にとりて、その構造を分解してみる。 2 文語文法の体系をわかりやすく図解してみる。 3 文語文法学習の成果について話し合う。

「鹿を犬にした話」は、単元「二 随想」に配置されている。単元の扉には「奈良公園の鹿」というキャプションがついた画像とともに次のような文章が添えられている。

随想という題をつけた文章が新聞や雑誌などによく載っている。随想とは思いつくまま、感じるままという意味のことばであるが、思索的なひびきも含まれているのでモンテーニュのエッセイなどは随想録とも訳されている。随想と随筆とはよく似たことばで、その内容からいってもはっきりした区別はつけにくい。しかし、随筆の中には、そのまま小説として通用するような創作的なかおりの高い文章もあるのに対して、もつとなまのまの心もちをしるしたもの、筆者がくつろいだ態度で座談ふうに読者に話しかけているような文章に随想という題がつけられることも多いようである。

ここに収めた三編は、いずれも深い学問と豊かな人生経験とをもった筆者たちが心からうちとけて、人生の味わいといったようなものをしみじみと感ぜさせてくれる文章である。

る。

教科書では、随想とは「思いつくまま、感じるままという意味のことば」であり、「随想と随筆とはよく似たことばで、その内容からいってもはっきりした区別はつけにくい」としている。随筆よりも「もつとなまのまの心もちをしるしたもの、筆者がくつろいだ態度で座談ふう読者に話しかけているような文章」であるとし、読者にとって親しみやすい文章であると述べている。

単元目標としては、右記の通り、次の三点があげられている。

1 随想の読み方になれる。

2 随想の表現方法を知る。

3 筆者のものの見方、考え方を理解する。

文章を読むことを通して、「筆者のものの見方、考え方を理解すること」が求められるところである。「もつとなまのまの心もちをしるした」随想ほどその人を語る文章はないであろう。平易なことばで綴られる中に、筆者の体験と思想がそのままにみ出ているところをぜひとも味わわせたいところである。

加えて、深い学問と豊かな人生経験をもった筆者たちに導かれ、学習者自らも思索の体験を深くさせたいものである。

学習者の具体的な学習活動については、右記の通り、次の三点があげられている。

- 1 読後感を話し合う。
- 2 随想を書いてみる。

3 書いた随想について発表し、批評しあう。

読後感を話し合うとともに、随想を書き、さらに交流し合うという学習活動が構想されている。

例えば、学習者の随筆を文集等にまとめて国語教室において回覧するという方法が考えられる。教室内相互の研鑽に資するとともに、相互の親和にも効果を及ぼすことであろう。

随想とはいっても、自由なテーマで取り組ませることには無理があるだろう。適切なテーマを指導者が提示する配慮が必要である。稿者の体験からいえば、随想は学習者から思いのほか歓迎されるはずである。ぜひ実践に移し、学習者の書く能力を高めたいと考えてある。

さて、教科書は第三学年用ものであるが、第一学年、第二学年も含めて、トータルに考えた場合、随筆・随想といった類はこの単元は高等学校で最後に学習することとなる。

第一学年からの随筆・随想教材を摘記する。

【第一学年】

七 「波の音」

波の音(和達清夫)

さんまの印象(末広恭雄)
流れ星(宮地政司)

【目標】

- 1 随筆について理解を深める。
- 2 科学随筆の特徴を知る。

【活動】

- 1 これまでに学習した随筆について話し合う。
- 2 印象の深かった部分を書きぬいてみる。
- 3 日常生活における科学的な見方について話し合う。

【第二学年】

七 「随筆の味」

音の世界(宮城道雄)
空の旅(川島理一郎)

海の怪異(寺尾新)

【目標】

- 1 随筆を通じて自然の神秘について関心を深める。

2 随筆を書くようになる。

【活動】

- 1 内容を短くまとめる。
- 2 教材に類似の資料を調べてみる。

一五 「科学者とあたま」

科学者と頭(寺田寅彦)

痕跡器官(駒井卓)

【目標】

- 1 科学的なものの見方・考え方を理解する。
- 2 科学者の文章に関心を深める。

【活動】

- 1 教材の内容について討論する。
- 2 教材から連想される事柄について研究してみ
る。

【第三学年】

一一 「随想」

時間の審判(天野貞祐)¹³

鹿を犬にした話(三淵忠彦)

水仙(鈴木大拙)¹⁴

【目標】

- 1 随想の読み方になれる。
- 2 随想の表現方法を知る。
- 3 筆者のものの見方、考え方を理解する

【活動】

- 1 読後感を話し合う。
- 2 随想を書いてみる。
- 3 書いた随想について発表し、批評しあう。

第一学年、及び第二学年においては、八教材中六教材が科学者の書く随筆である。いわゆる理系の素養のある者の視点から書かれた文章ということである。残り二教材は音楽家、画家の

ものであり、芸術家の観察眼が光る文章である。

一方、この單元では、哲学者、法律家、仏教学者の文章が並ぶ。学習者はこれまでとは違った文章と接する好機となることである。

二 題材配列

この單元は次の三編の題材で構成されている。

- ・ 時間の審判(天野貞祐)¹³
- ・ 鹿を犬にした話(三淵忠彦)
- ・ 水仙(鈴木大拙)¹⁴

本稿で扱う「鹿を犬にした話」は「時間の審判」、「水仙」の間に挿入される形の構成となっている。

「時間の審判」は、無限の過去から無限の未来に流れて止まない時間の神秘と靈力とを述べ、公平な時間の審判にたえ得るものは道理あるもののみであることを強調している。天野貞祐は文部大臣をつとめ、道徳教育を主張し続ける人物である。淡々と語るような文章の端々に天野の主張がほの見える随想である。

「水仙」は世界的に有名な仏教学者・鈴木大拙の片鱗を窺うに足る随想である。「草木国土一切成仏」といった境地は到り難いことではある。混沌とした現代を生きる私たちにとっては一服の清涼剤の思いがする。

三 筆者、及び原典

1 筆者・三淵忠彦

筆者について、教科書頭注には次のような記述がある。

三淵忠彦

(一八八〇—一九五〇)

岡山県生。京都大学法学部卒。法学者、初代最高裁判所長官。

筆者について、稿者は「教材「ろくをさばく」考(一)」「北海道教育大学紀要『教育科学編』第五十九巻第一号 平成二十年(二〇〇八)八月 一—一六頁)において、年譜を作成し詳述したことがある。ご参照いただければ幸いである。本稿では、「教材「ろくをさばく」考(一)」を踏まえつつ、教科書頭注を補足することとする。

筆者は「岡山県生」とあるが、本籍は福島県会津若松市である。筆者の父・安之助は、旧会津藩士で、萱野権兵衛長修の弟である。筆者の伯父の権兵衛は会津藩家老であった。戊辰戦争に敗れ、敗戦後の藩の全責任は藩主である松平容保ではなく、家老である権兵衛が責任を問われる。三人の家老のうち二人は自刃し、権兵衛は朝敵の責を一身に負い、主謀という名の下、明治二年(一八六九)朝廷から死を賜る。萱野家は断絶の命を受け、三淵姓を名乗ることとなった。筆者の父は、戊辰難後、父母を奉じて岡山、東京、茨城、福島、山形などの各府県を流浪したのである。筆者は岡山流浪の際に誕生する。

明治三十一年(一八九八)仙台の第二高等学校に進学、その後東京帝国大学法科に入学した。しかし、両親と弟を相次いで失い、失意のため突如として学業を中断する。京都に移り、明

治三十八年(一九〇五)京都帝国大学法科を卒業する。

新聞記者を希望していたが、東京に戻り、親族にあたる司法省の役人石渡敏一の書生となる。石渡のすすめにより司法官となり、各地を歴任した。

大正十四年(一九二五)東京控訴院上席部長在任時に退官し、三井信託株式会社の法律顧問に就任した。

司法官在任時より、慶應義塾大学法学部、経済学部で民法の講義を担当した。教科書頭注では「法学者」としているが、筆者の長男・三淵乾太郎が「父は、法学者ではなかったが、実務家としては、なかなか有能な人であった」と述べるように、「法学者」とするには問題がある。筆者を「法学者」とした点について、慶應義塾大学に出講していたことだけを根拠としているならば、誠に不確かであると言わざるを得ない。

昭和二十二年(一九四七)八月四日、初代最高裁判所長官に任命される。当時の首相であった片山哲は筆者と旧知の間柄であり、司法大臣の鈴木義男、参議院議長であった松平恒雄などの働きかけがあり、初代長官を務めるに至った。

昭和二十五年(一九五〇)三月二日、最高裁判所長官を健康上の理由により退官する。同年七月十四日、回盲部腫瘍により、亡くなった。

2 原典「世間と人間」

教科書本文末尾に本文の原典について(「世間と人間」による)の記述がある。

原典『世間と人間』について、稿者は「教材」ろくをさばく考(5)、「北海道教育大学紀要(教育科学編)第六十一巻第一号 平成二十二年(二〇一〇)八月 一—一六頁)において、原典の構成、扉、後記の記述、『世間と人間』というタイトルそのものについて分析・考察したたことがある。ご参照いただければ幸いである。

『世間と人間』の奥書によれば、昭和二十五年(一九五〇)三月二十日印刷、同二十五日に朝日新聞社からの発行となっている。

その年の三月二日、筆者は最高裁判所長官を退任する。翌日、カトリックの洗礼を受け、七月十四日に回盲部腫瘍により亡くなっている。『世間と人間』はいわば筆者の人生の集大成ともいえるのである。

『世間と人間』中に「世間と人間」という随筆が所収されている。

随筆「世間と人間」には、法曹の世界に生きる人間のあり方、姿勢が綴られている。法曹の世界において、人間を知り、世間を識ることの重要性が述べられている。もともと人間が何人か集まれば、そこに一つの社会、世間ができる。社会ができれば、そこで生きる人間が生きやすいようにルールというものが必要となってくる。法律がなければ社会は混乱していき、住み難い世の中となってくるというのである。

『世間と人間』は、最高裁判所長官を退官する記念に発刊された書である。別の意味からいえば、法曹の世界を去る際に発

刊された書でもある。これからの法曹の世界へのメッセージとも受け取ることができる。よき裁判を行なうためには、世間と人間を熟知することが大切であるというのである。

世間をよいものにし、そこで生きる人間に幸せをもたらすものが法律であり、その法律を司るのが法曹の世界の人間である。したがって、法曹の世界の人間は、実際の世間と人間をよく観察し、裁判しなければならぬとしている。

注

1ときぜんまる土岐善麿一八八五—一九八〇 明治十八—昭和五

十五

明治から昭和時代にかけての歌人、国文学者。別号湖友・哀果。明治十八年(一八八五)六月八日東京市浅草区松清町(東京都台東区西浅草一丁目)の真宗大谷派等光寺に生まれる。学僧であった父善静、母観世の次男。明治三十六年(一九〇三)東京府立一中在学中に金子薫園選の『新声』歌壇に投稿。明治三十七年(一九〇四)早稲田大学英文科入学、大学時代に島村抱月に師事。若山牧水らと交友する。明治三十八年(一九〇五)金子薫園の「白菊会」(参加、明治四十一年(一九〇八)早大卒業、読売新聞社に入社、社会部長などを経て、大正七年(一九一八)退社、同年朝日新聞社に入社し、定年まで勤務。傍ら早大などに教鞭をとり、のち武蔵野女子大学(現武蔵野大学)教授。窪田空穂の『まひる野』に感銘、明治四十三年(一九一〇)ローマ字三行書きの第一歌集『NAKIWARAI』を出版。ローマ字運動に参加、関係書が多い。内面の心情につきながら、覚めた意識の作を開拓。明治

四十四年(一九一二)石川啄木の本集への批評が機縁となり、ともに社会思想啓蒙の『樹木と果実』の発刊を志したが、主として啄木の発病のため挫折。社会主義的思想に近接し、明治四十五年(一九一三)の『黄昏に』の三行書き歌集は、都会勤労者、知識人の知的哀歎を歌つて、歌風は確立する。大正二年(一九一三)『生活と芸術』創刊。社会意識に目覚めた、いわゆる生活派の源流となつたが、大正五年(一九一六)『魔刊。詩歌集』不平なく、『街上不平』などがあり、『雑音の中』で一行書きにかえり、徐々に作品も変わる。大正十三年(一九二四)『日光』に参加。常に韻律と定型詩変革の意欲の中に、昭和初期には一時、口語自由律の作を試み、『新歌集作品』などがある。昭和十五年(一九四〇)『六月』は、戦争に突入する暗い時代の知識人の良心を歌つた集。戦後は昭和三十三年(一九五八)の『歴史の中の生活者』で、記紀に取材する大連作であり、倭建など古代の人物を壮大な叙事詩的叙情として歌うなど、短歌の叙情や韻律の革新への意欲は生涯に及ぶ。死に至るまで旺盛に作歌を続けた。この間、エスベラント語関係の活動、新作能の詞章の創作、多くの漢詩和訳を行い、昭和二十二年(一九四七)帝国学士院賞を受けた『田安宗武』や『京極為兼』など古典研究、中国詩の和訳と研究、杜甫研究にも傾注した。歌論など多く、歌集は四十冊近い。また文部省国語審議会議長、東京都立日比谷図書館長、日中文化交流協合理事などに任じた。芸術院会員。文学博士。昭和五十五年(一九八〇)四月十五日東京都目黒区下目黒の自宅で死去。九十四歳。

武川忠一『土岐善麿』(短歌シリーズ・人と作品)II桜楓社 昭

和五十五年(一九八〇)十月

2こしみずみのる輿水実 一九〇八—一九八六 明治四十一—昭和六十一

山梨県に生まれる。昭和六年(一九三二)東京帝国大学哲学科卒業、垣内松三国語研究所に入所。昭和八年(一九三三)東京帝国大学大学院修了、文学社(垣内松三の教科書発行社)編集顧問。昭和十年(一九三五)大西雅雄・波多野完治・右井庄司・金原省吾らと『コトバの会』を作り、雑誌『コトバ』(垣内松三創刊)を継続。昭和十三年(一九三八)東京府東京市仰高西小学校代用教員、翌昭和十四年(一九三九)東京市新泉小学校に転任(本科正教員)。昭和十五年(一九四〇)『コトバの会』を改組、大西雅雄・石黒修・石山脩平らと『国語文化学会』を作る。『コトバ』編集代表となる。昭和一六年(一九四二)財団法人青年文化協会アジア学院教授。昭和二十年(一九四五)三重師範学校教授。昭和二十一年(一九四六)から文部省教科書編纂委員、教科用図書検定調査会委員、教育課程審議会委員、学力水準調査研究会専門委員、全国学力調査問題作成委員長、教材等調査委員会委員長等を歴任、特に昭和二十二年(一九四七)から昭和四十三年(一九六八)まで一貫して学習指導要領の編集責任に当たる。昭和二十四年(一九四九)国立国語研究所第三研究室主任。昭和二十八年(一九五三)国立国語研究所第二研究部長。昭和三十七年(一九六二)個人雑誌『国語教育の近代化』創刊。昭和四十五年(一九七〇)国立国語研究所退官。国語教育研究所創設。国立国語研究所名誉所員。東京帝国大学で哲学を専攻し、昭和六年(一九三二)垣内松三によって言語哲学と国語教育の研究にはいる。以来、言語哲学を基礎とし、垣内松三の研究を継承、発展させ、欧米諸国の国語教育

理論及び教育学の理論を批判的に摂取しながら、我が国の国語教育界で傑出した指導者として活躍した。昭和十年（一九三三）の『言語哲学』は二十七歳の著作で、昭和六十一年（一九八六）の『国語教育解釈学』—その理論と実践』までの五十年を国語教育研究一筋に専念し、その間に書かれた著書、編著書、雑誌掲載論文等は他に類例のない夥しい数にのぼる。その国語教育理論は、いずれも言語哲学を基礎学とする深遠なるものであるにもかかわらず、論理が明快で、しかも平明・達意の文章を実践したから、国語教育の現場に広く迎えられ、「輿水理論」として圧倒的に支持された。「輿水理論」については、基本は垣内松三の研究の継承、発展であるが、機能的国語教育の提唱、基本的指導過程の提唱、国語スキル学習の提唱、学習作文の提唱、国語教育解釈学の提唱など、いずれも国語教育の科学化、近代化を目指したものである。

小川末吉「輿水実」(『国語教育研究大辞典』)

3しみずしげみち清水重道 一九一〇—一九五八 明治四十—

昭和三十—

昭和八年（一九三三）東大国文科卒。東京高校、東京音楽学校、北海道第三師範、群馬大学教授を歴任。著書に『まぐらのそうし』山雅房 昭和二十六年（一九五二）五月、『日本文学の歴史の上世編』(青也書店 昭和二十八年（一九五三））、『アイヌの神話と伝説』(同和春秋社 昭和三十年（一九五五）九月)などがある。東京大学文学部国文科卒業後、旧制藤沢中学、荏原中学教諭、東京高校教授、日本大学教授を歴任。併任して昭和十八年（一九四三）十二月から昭和二十年（一九四五）六月まで東京音楽学校教職課程の非常勤講師として勤

務。昭和二十年（一九四五）十二月、敗戦後の廢墟と食糧難の東京から旭川に移転し、昭和二十三年（一九四八）九月まで旭川師範学校（現北海道教育大学旭川校）国文学教授。群馬師範学校（現群馬大学教育学部）教授、昭和二十九年（一九五四）八月退職。日本歯科大学教授。昭和三十三年（一九五八）四月二十三日、四十八歳の若さで死去。

4しがいちろう志賀一朗 一九一五— 大正四—

大正四年（一九一五）、茨城県北茨城市関本町に生まれる。東京高等師範学校文科第五部を経て、東京文理科大学漢文学科卒業。同研究科修了。東京都立板橋高等学校長。国士館大学文学部教授。財団法人斯文会参与。湯島聖堂朗詠会会長。文学博士。

5わだちきよお和達清夫 一九〇二—一九九五 明治三十五—平成七

昭和平成時代の気象学者、地球物理学者。明治三十五年（一九〇二）九月八日名古屋に生まれる。大正十四年（一九二五）東京帝国大学物理学科を卒業。東京帝大で寺田寅彦らにまなぶ。大正十四年（一九二五）気象庁の前身中央気象台に勤務、初めはもっぱら地震を研究して、深所に発生する地震の研究で地震の分類・統計解析に画期的な進歩をもたらし、深発地震がかたむいた面上に発生することをつきとめた。和達IIベニオフ帯に和達の名が今も残っている。地震のエネルギーをあらわすマグニチュードは、和達の研究がヒントになって作られたものである。昭和七年（一九三二）学士院恩賜賞を受けた。昭和十八年（一九四三）満州国観象台長、昭和二十二年（一九四七）中央気象台長。昭和三十一年（一九五六）気象庁への昇格に伴い初代長官とな

り、昭和三十五年(一九六〇)には第五期日本学術会議会長に選出された。昭和三十八年(一九六三)気象庁退官後は国立防災科学技術センター(現、防災科学技術研究所)所長、昭和四十一年(一九六六)埼玉大学学長、昭和四十九年(一九七四)日本学士院院長を歴任し、昭和五十七年(一九八二)から東京地学協会会長となる。昭和二十二年(一九四七)地震予知研究連絡委員会発足とともに委員長、昭和四十五年(一九七〇)中央公害審議委員会会長就任と、防災体制への寄与も大きい。昭和六十年(一九八五)文化勲章を受章した。平成七年(一九九五)一月五日死去。九十二歳。子に物理学者和達三樹がいる。

石山洋「和達清夫」(『日本大百科全書』)

6すえひろやすお末広森雄 一九〇四—一九八八 明治三十七—

昭和六十三

昭和時代の魚類学者。明治三十七年(一九〇四)六月四日東京生まれ。末広恭二の長男。東京帝国大学農学部水産学科卒。農学博士。農林省に農林技官を任官、のちに水産試験場七尾分場長に就任。昭和十九年(一九四四)東京帝大教授、昭和四十二年(一九六七)油壺マリナーパーク水族館館長。ナマズの地震予知能力などを研究。シーラカンス学術調査隊を結成、総指揮をとる。日本作曲家組合会員、東京大学名誉教授、勲三等旭日中綬章。随筆『魚の履歴書』(もんじゅ選書)講談社 昭和六十一年(一九八六)などで魚の知識の普及につとめた。昭和六十三年(一九八八)七月十四日死去。八十四歳。

7みやじまさし宮地政司 一九〇二—一九八六 明治三十五—昭

和六十一

昭和時代の天文学者。明治三十五年(一九〇二)十月七日広島県因島市生まれ。大正十四年(一九二五)東京帝国大学理学部天文学科卒業。ジャワ島ボス天文台長。東京天文台現国立天文台国際観測所研究主任をへて、昭和二十四年(一九四九)東大教授、昭和三十三年(一九五七)東京天文台長となる。日本標準時の精密測定、経度変化の観測による地球自転の極運動の検出を研究。昭和六十一年(一九八六)十月十一日死去。八十四歳。

8みやぎみちお宮城道雄 一八九四—一九五六 明治二十七—昭

和三十一

大正・昭和時代前期にかけての代表的箏曲家の一人。生田流箏曲演奏家、作曲家。明治二十七年(一八九四)四月七日、菅国次郎の長男として神戸に生まれる。明治三十五年(一九〇二)七歳のとき眼疾のため失明。八歳で箏曲・地歌を生業に選り、神戸の二代中島検校中寿一(初世絃教)に入門。二年後師匠が病没し、その没後は、三代中島伊三郎(二世絃教)に師事した。明治三十八年(一九〇五)十一歳で免許皆伝となり、中昔の芸姓を許され師の代稽古を務める。前芸名中菅道雄。明治四十年(一九〇七)十三歳のとき一家の生計を支えるため朝鮮半島に渡り、教授所を開いて一家を支えた。父の在住する仁川で箏の師匠となる。明治四十三年(一九一〇)京城に移住。大正二年(一九一三)入り婿して改姓し、芸名をやめて本名の宮城道雄を名づける。宮城は朝鮮時代にもたびたび神戸の旧師中島や熊本的地歌名手長谷幸輝を訪れて修行を積み、大正五年(一九一六)大検校の称号を受ける。大正三年(一九一四)、尺八家吉田晴風に会い生涯の親友となり、大正六年(一九一七)先に上京した晴風に呼び寄せられて東京

に赴き、生活苦と闘いつつも洋楽作曲法、洋楽器、雅楽などを学び、箏、三味線、尺八の音楽を基礎に洋楽的要素を摂取した新傾向の作曲活動を本格的に開始した。大正八年(一九一九)第一回作品発表会を東京本郷中央会堂で催し、以来毎年新しい作品の発表を行なう。第二、第三回を東京音楽学校奏楽堂で開く。保守的な邦楽界は冷淡だったが、文化人、評論家、洋楽作曲家の注目を浴び、しだいに各界人士の支持・後援を得るにいたる。大正九年(一九二〇)には晴風の発案によって、本居長世の作品とともに、「新日本音楽」と銘打って新作の発表会を催した。以来これが宮城、晴風らの新作活動の通称となった。さらに大正十二年(一九二三)から尺八家の初世中尾都山とともに日本各地を巡演し、都山流の組織により宮城曲は全国的に広まった。また、一九二〇年代は宮城の大活躍の時期である。多くの新作曲の発表、新楽器(七弦、新胡弓、短箏、八十弦)の考案、楽譜の著作等々、顕著な業績がこの期に集中している。演奏活動も死にいたるまで盛んで名手といわれたが、とくに一九二〇年代には草創期のレコードやラジオにも積極的に出演したので宮城の名は大いに広まり、他方では古曲演奏や古曲風新作曲にも努力したため、その実力は保守勢力からも評価されるにいたった。彼の才能は葛原しげる、高野辰之、山田源一郎、田辺尚雄ら洋楽系作曲家、評論家、学者などに注目され、助言や後援を受ける。加えて、フランスのバイオリン奏者ルネシユメーは宮城の「春の海」(昭和四年(一九二九))を編曲して宮城と合奏し、それをレコードに吹き込み、世界的名曲ならしめた。昭和五年(一九三〇)には東京音楽学校講師となり、昭和七年(一九三二)教授となった。また、昭和五年(一九三〇)以来、東京盲学校にも出講。そのこ

ろから自宅の門弟も急増した。昭和二十三年(一九四八)日本芸術院会員。昭和二十五年(一九五〇)NHK第一回放送文化賞受賞。昭和二十八年(一九五三)フランス、スペインの国際民族音楽舞踊祭に日本代表で参加し、イギリスにも遊び各国で演奏して、絶賛を浴びた。昭和三十一年(一九五六)六月二十五日、関西への演奏旅行の途上、東海道線愛知果刈谷駅付近において夜行列車から転落死。六十二歳。東京都台東区の谷中墓地に葬られる。修行なかばで師のもとを離れた彼は既習曲の反復だけでは飽き足らず、作曲を志し、明治四十二年(一九〇九)処女作「水の変態」を作曲。作曲は三百五十曲を超える。以来、特に新日本音楽と銘打って創作された作品は非常に多い。大正十年(一九二二)に考案した十七絃を用いた大編成の合奏曲から童曲まで、作曲作品は三百曲を超える。代表曲に「秋の調」(大正八年(一九一九))、「落葉の踊り」(大正十年(一九二二))、「せきれい」(大正十二年(一九二三))、「さくら変奏曲」(大正十二年(一九二三))、「瀬音」(大正十二年(一九二三))、「越天楽変奏曲」(昭和二年(一九一七))、「春の海」(昭和四年(一九二九))、「虫の武蔵野」(昭和七年(一九三二))、「道灌」(昭和十一年(一九三六))、「教え唄変奏曲」(昭和十五年(一九四〇))、「手事」(昭和二十一年(一九四六))、「日蓮」(昭和二十八年(一九五三))、「ロンドンの夜の雨」(昭和二十八年(一九五三))など現在でも演奏される曲が多い。宮城の功績は、箏曲の伝統に根ざしつつ洋楽を取り入れ新しい日本の音楽を創始した点にある。和洋音楽の融合、楽曲形式の拡張、技巧の飛躍的拡大、邦楽器の新考案・改良、教習面の新工夫等々、まことに多角的である。また、随筆家としても有名で、『雨の念仏』(三笠書房 昭和十年(一九三五)二月)

ほかの随筆集十点のちに『宮城道雄全集』(全三巻 三笠書房 昭和三十三年(一九五七年)に収録)を著している。一門は昭和二十六年(一九五一年)に「宮城会」として組織化され、現在も生田流箏曲界の一大会派として存続する。養女の宮城喜代子(明治三十八(一九〇五)―平成三年(一九九二)道雄の姪。重要無形文化財保持者が後継者として統率し、「宮城会」の主宰者を務めていた。平成三年(一九九二)にはその妹数江が会長を継いでいる。昭和五十三年(一九七八)財団法人宮城道雄記念館が東京都新宿区中町に設立され、吉川英史が初代館長をとめる。

小野衛『宮城道雄の音楽』(音楽之友社 昭和六十二年 一九八七)

千葉潤之助・千葉優子『宮城道雄音楽作品目録』(宮城道雄記念館 平成十一年(一九九九)六月)

吉川英史『宮城道雄伝』(邦楽社 昭和五十六年(一九八二)八月)

吉川英史・上参郷祐康『宮城道雄作品解説全書』(邦楽社 昭和五十四年(一九七九)六月)

吉川英史・宮城喜代子監修『宮城道雄作品大全集』(ビクターレコード解説書 (平成六年(一九九四)))

9 かわしまりいちろう川島理一郎 一八八六一―一九七一 明治十九―昭和四十六

大正昭和時代の洋画家。明治十九年(一八八六)三月九日栃木県足利市生まれ。幼少から東京に住み、明治三十八年(一九〇五)渡来してワシントンのコーロン美術学校ほかで学ぶ。明治四十四年(一九一

一)パリへ移り、アカデミー・ジュリアン、ついでアカデミー・コラッソに学び、サロンドートンヌ又に出品。大正八年(一九一九)に帰国する。その後もしばしば渡欧を重ねた。大正十五年(一九二六)国画創作協会洋画部(のちに国画会)を梅原龍三郎と創設したが、昭和十年(一九三五)に退会。翌昭和十一年(一九三六)から女子美術学校(現女子美大)の教授となり、改組後の文展審査員を務める。昭和二十三年(一九四八)日本芸術院会員となり、日展に出品、また新世紀美術協会の名誉会員となる。フォービズム風から晩年は抽象作風に転じた。昭和四十六年(一九七二)十月六日死去。八十五歳。

小倉忠夫(川島理一郎)『日本大百科全書』
10 てらおあらた寺尾新 一八八七―一九六九 明治二十一昭和四十四

大正昭和時代の動物学者。明治二十年(一八八七)九月八日東京生まれ。寺尾寿の子。石川千代松の娘婿。東京帝大卒。水産講習所(現東京海洋大)教授。民族科学研究所員をへて、宮崎大教授となる。生物測定学、水産動物の増殖などを研究した。昭和四十四年(一九六九)五月十四日死去。八十一歳。著作に『科学魂』(帝国教育会出版部 昭和十六年(一九四一))、『動物はささやく』(観察と実験文庫) 同和春秋社 昭和二十九年(一九五四)など。

11 てらだたらひこ寺田寅彦 一八七八―一九三五 明治十一―昭和十

明治から昭和時代にかけての物理学者、随筆家。筆名吉村冬彦、俳名藪柑子または寅日子。明治十一年(一八七八)十一月二十八日、東京府麹町区麹町平河町に生まれる。高知県土族、陸軍会計監督、寺

田利正の長男。母は亀。幼時を父の郷里の高知ですくす。高知県立尋常中学校より、明治二十九年（一八九六）に熊本の第五高等学校にはいり、田丸卓郎（明治五—昭和七年（一八七二—一九三二）に物理学を学び自然科学への眼を開かれる。明治三十二年（一八九九）東京帝国大学理科物理学科に入学、明治三十六年（一九〇三）卒業、大学院に入り実験物理学を専攻する。明治四十一年（一九〇八）尺八の音響学的研究で理学博士を得る。明治四十二年（一九〇九）東京帝国大学助教となり、同年地球物理学研究のために外遊してドイツほかヨーロッパ各地とアメリカを訪ね、明治四十四年（一九一）帰国。大正五年（一九一六）教授となる。実験物理学、気象学、地球物理学の研究にしがたい分野に独創的な業績をあげた。明治四十五年（一九一）末ごろからX線の結晶透過の実験（ラウエ斑点）という開拓的な研究に着手し、大正二年（一九一三）イギリスおよび日本の学術誌に報告文を発表して、結晶格子中の網平面によるX線反射の条件を論じた。これはいわゆるブラッグ条件と密接に関係する業績であつて、協力者であつた西川正治とともに「ラウエ斑点の撮影に関する研究」で大正六年（一九一七）の帝国学士院恩賜賞を受けたが、寅彦はブラッグに後れたとしてまもなくこの方面の研究から遠ざかった。大正十年（一九一）東京帝国大学航空研究所員、大正十三年（一九一四）理化学研究所員、大正十五年（一九二六）東京帝国大学地震研究所所員となる。学士院会員・学術研究会議議員に選ばれる。昭和二年（一九二七）A.ウエグナーの大陸移動説をとり入れた日本海形成論を唱え、昭和五年（一九三〇）よりは割れ目の物理学を開始し、ガラス板の破壊実験を行うとともにその発想を生命にまで広げ「割れ目と生命」

の論文を書いた。流体、コロイド、粉体、放電、破壊、燃焼、視覚などにかかわる実験や考察を多角的に展開し、また地震・火災の害や防災について論じた。一貫する関心事は、従来の決定論的な枠組みに入りきれない不安定現象、統計的現象、形態など新しい物理学の建設であつたといえる。昭和十年（一九三五）十二月三十一日東京市本郷区駒込曙町の自宅において死去、年五十八。墓は高知市東久万の寺田家墓地にある。寅彦は、当時ヨーロッパの物理学の最先端で推進されていた量子論のような革命的な方向は日本人には参加できないものとみなし、それよりもみずからの日常世界に科学者の眼を向けようとしてさまざまな独創的な道をきりひらいている。その科学上の仕事は主として応用物理学の面になるが、墨流しや尺八の研究などは、独自の「寺田物理学」をひらいたものとして、評価される一面、趣味的で二流の物理学だとして、主流の物理学者から批判されることもある。科学者としての活動と平行して、活発な文筆活動を展開し多数の随筆や俳諧作品を残した。熊本の第五高等学校で夏目漱石に英語、俳句を学んだ。漱石の紹介で上京後正岡子規を訪ね、雑誌『ホトトギス』に随筆小文を発表した。やがて高浜虚子らの文章会に出席、ドイツ留学に赴くまでに「困栗」（明治三十八年（一九〇五））、「竜舌蘭」（明治三十八年（一九〇五））以下の小品を発表、自然と人事への哀愁を帯びた観照を端正な文章に刻んだ諸作は、『藪柑子集』（大正十二年（一九二二））に収められている。またその特徴ある科学観を底流として、『冬彦集』（大正十二年（一九二二））、『万華鏡』（昭和四年（一九一九））、『蒸発皿』（昭和八年（一九三三））、『椽の実』（昭和十一年（一九三六））にあつめられたような科学随筆を書いた。また俳号寅日子の名で雑誌『沓柿』に関係し、

松根東洋城と連句を作った。死後『寺田寅彦全集』文学編十六卷(昭和十一—十三年(一九三六—三八))科学編六卷(昭和十三—十四(一九三八—一九三九))が刊行された。初期の作品にはホトトギス派の写実的な文章が多い。後年は文学論、映画論、さらに科学の方法論や科学教育など、文化の広い領域に及んでいる。日本の風土の特殊性から災害現象にも強い関心をもち、数多くの警世的な文章を書いたが、この方面の文章は『天災と国防』(岩波書店 昭和十三年(一九三八)十一月)に収められている。その災害論は「天災は忘れたころにくる」という寅彦のことば書かれた文章中にはこの句はないが)に集約されており、今日なお示唆に富む。その真意は、過去の災害の教訓をいかしきれない人間の対応を分析したものである。これら数多くの随筆は、いずれもこまやかな観察とゆたかな学識に裏づけられたもので、人々の感性と知性のはたらきを刺激するものがあり、現在まで多くの人々に愛読されている。門下の中谷宇吉郎、藤原映平、平田森三、安倍能成らがあり、それぞれ寺田の多様な側面を引き継いだ。

安倍能成・小宮豊隆他編『寺田寅彦全集』全十七卷(岩波書店

昭和三十五—三十七年(一九六〇—六二))

宇田道隆『寺田寅彦』(世界伝記文庫) 国土社 昭和五十二年

年(一九七七)三月)

太田文平『寺田寅彦』(新潮社 平成二年(一九九〇)六月)

高知県高等学校教育研究会歴史部会編『高知県の歴史散歩』

(歴史散歩)三九 山川出版社 平成十八年(二〇〇六)八月)

月)

小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集』全五卷(岩波文庫)岩波書店

平成五年(一九九三))

松本哉『寺田寅彦は忘れた頃にやって来る』(集英社新書)集英

社 平成十四年(二〇〇二)五月)

山田一郎『寺田寅彦覚書』(岩波書店 昭和五十六年(一九八

二)十一月)

12こまいたく駒井卓 一八八六—一九七二 明治十九—昭和四十

七

大正昭和時代の遺伝学者。日本におけるショウジョウバエの遺伝学や人類遺伝学の草分け的存在の一人。明治十九年(一八八六)五月九日兵庫県姫路市生まれ。姫路中学から明治四十一年(一九〇八)東京高等師範学校博物学科を卒業、大正六年(一九一七)東京帝国大学理学部動物学科選科修了。大正九年(一九二〇)京都帝国大学理学部助教となり、その後、大正十二年(一九二三)よりアメリカのコロンビア大学のT・H・モーガンの下でショウジョウバエの遺伝学の研究を行い、日本におけるこの分野の研究の端緒を開いた。大正十四年(一九二五)京都大学教授、同理学部長、東京大学教授をも兼任。日本学士院会員、日本学術会議会員、日本遺伝学会会長も務め、国立遺伝学研究所生理遺伝部長として、設立まもない同研究所の基礎確立に大きな役割を果たした。甲殻綱口脚類や腔腸動物のクシクラゲ類、原索動物などの分類学、発生学の研究や、チョウ、ショウジョウバエ、テナントウムシなどの昆虫やカタツムリ、ネコさらにはヒトの細胞学および遺伝学的研究に大きな貢献をした。人類遺伝に関心を示し、日本人の遺伝的特性について研究、また集団遺伝学の先駆的研究も行う。日本の遺伝学界をつくりあげた一人。昭和四十七年(一九七二)七月九日死去。八

十六歳。著書に『日本人を主とした人間の遺伝』(創元選書)創元社
昭和十七年(一九四二)八月)、『人類を主とした遺伝学』(培風館
昭和二十七年(一九五二))、『遺伝学に基づく生物の進化』(培風館
昭和三十八年(一九六三)九月)、『人類の遺伝学』(培風館 昭和
四十一年(一九六六)八月)など多数ある。旧姓・福田。

黒田行昭(駒井卓)『日本大百科全書』

鈴木善次(駒井卓)『世界大百科事典』

13 あまのていゆう天野貞祐 一八八四—一九八〇 明治十七—昭和五十五

大正、昭和時代の哲学者、教育家。明治十七年(一八八四)九月三十日、天野藤三・種の四男として、神奈川県津久井郡鳥屋村(津久井町)に生まれる。明治三十九年(一九〇六)第一高等学校に入学し、九鬼周造・児島喜久雄らと交わる。明治四十二年(一九〇九)京都帝國大学文科大学哲学科に進み、桑木厳翼のもとでカント哲学を学ぶ。明治四十五年(一九一〇)同校卒業後、教育者を志望し第七高等学校ドイツ語教師、学習院などの教授を経て、大正十五年(一九二六)京都帝國大学文学部助教となり、西洋哲学史(のちに倫理学)を担当。この間、七高教授時代に岩下壮一と親交を結び、大正十二年(一九二三)にドイツに留学している。昭和五年(一九三〇)にカント『純粹理性批判』を訳了。昭和六年(一九三一)京大教授となり、文学博士号を受ける。昭和十年(一九三五)『カント純粹理性批判の形而上学的性格』を出版。昭和十二年(一九三七)『道徳の感覺』を刊行し、全体主義化の風潮に抗して自由主義的個人主義の意義を説いたが、反軍思想の疑いがかけられ自発的絶版を余儀なくされる。昭和十九年

(一九四四)京大を停年退官し、甲南高等学校長となる。第二次世界大戦後、昭和二十一年(一九四六)に第一高等学校校長となり旧制高校の教育的役割を高く評価し、昭和二十三年(一九四八)新学制による同校の東京大学への併合に反対して辞任した。昭和二十二年(一九四七)からは教育刷新委員会委員として教育政策の決定に参加、教育基本法制定にもかかわった。日本育英会会長を経て、昭和二十五年(一九五〇)五月に吉田茂の懇請により、第三次吉田内閣の文部大臣となる(昭和二十七年(一九五二)まで)。文相時代には「静かなる愛国心」、道徳教育の強調、「国民実践要領」などで世間の批判を浴びたが、他方、教員給与費の半額国庫負担を制度化した。戦後の天野は個人主義のゆきすぎを憂い、天皇や国家の意義を強調する保守主義的国家主義に傾いたのである。昭和二十五年(一九五〇)『今日に生きる倫理』(要選書)要書房)を刊行。その後、中央教育審議会委員(昭和二十八—四十二年(一九五三—六七))また会長(昭和三十—三十八(一九五五—六三))として活動。この間、昭和二十八年(一九五三)独協大学学長。自由学園理事長。昭和三十六年(一九六一)文化功労者となる。昭和五十五年(一九八〇)三月六日、老衰のため東京都武蔵野市吉祥寺の自宅で没。九十五歳。人生論、教育論、学生論も多い。『天野貞祐全集』全九巻(昭和四十五—四十六年(一九七〇—七一)栗田書店)がある。

安倍能成『道徳の感覺』(『思想』第一八五号 岩波書店 昭和十二年(一九三三)十月)

天野貞祐『忘れえぬ人々 自伝的回想』(河出書房 昭和二十八年(一九五三))

天野貞祐『天野貞祐 わたしの生涯から』(人間の記録)一五二

日本図書センター 平成十六年(二〇〇四)八月)

蝦名賢造『天野貞祐伝』(西田書店 昭和六十二年(一九八七)十二月)

唐沢富太郎『図説 教育人物事典 日本教育史のなかの教育者群像 下』ぎょうせい 昭和五十九年(一九八四)七月)

久野収 鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』(中央公論社

昭和三十四年(一九五九)五月)

新宮譲治『獨逸学協会学校の研究』(校倉書房 平成十九年(二〇〇七)四月)

14 すぎだいでつ 鈴木大拙 一八七〇—一九六六 明治三—昭和四十一

明治から昭和時代にかけての国際的な宗教学・仏教学者。本名貞太郎。その名はDaisetz T. Suzukiとして、国内よりもむしろ国外に広く知られる。明治三年(一八七〇)十月十八日、金沢市下本多町三番丁七番に生まれる。父は医師良準、母は増。四男一女の末子として生まれる。六歳のときに父を失う。第四高等中学校予科から本科に進学、中退して小学校の訓導英語教師となり家計を助けた。明治二十四年(一八九一)一月訓導を辞して二十一歳のとき上京。東京専門学校(早稲田大学の前身)に学び英文学を修めた。ついで明治二十五年(一八九二)九月東京帝国大学文科大学哲学科選科に入学する。選科への入学は同郷の学友西田幾多郎の勧誘による。上京して直ちに鎌倉円覚寺に参禅し、今北洪川・釈宗演に師事を重ねる。大拙の名はこの宗演から受けた居士号である。明治二十八年(一九九五)七月選科

を修了、明治三十年(一八九七)三月、宗演の推薦により渡米、イリノイ州ラサルに住む。オープンコート出版社The Open Court

Publishing Companyの編集員として、哲学者ポールケラスを助けて東洋学関係の出版に従事するかたわら勉学に励む。在米十二年、明治四十二年(一九〇九)四月ヨーロッパを經由して帰国する。その間独学にて仏教の思想的研究をすすめ、明治三十三年(一九〇〇)三十歳の時に馬鳴(アンユゴシヤ)の『大乘起信論の英訳、すなわち『Awagha osha's Discourse on the Awakening of Faith in the Malayana』をオープン・コート出版社から、続けて明治四十年(一九〇七)には英文による『大乘仏教概論』(Outlines of Mahayana Buddhism in London)のルザック社Luzac and Companyからを刊行し、翌明治四十一年(一九〇八)にオープン・コート出版社からまた刊行するに及んで、大拙の名は新進の仏教学者として、一躍して欧米に知られた。海外にその名が知られる。四十一歳のとき明治四十四年(一九一一)十二月ピートルスレーンと結婚。帰国の前年の九月、オックスフォードで開かれた万国宗教学史学会に選ばれて東洋部副会長となる。爾来、国際的な学術会議に日本を代表して欧米に赴くことしばしばとなる。帰国した明治四十二年(一九〇九)十月東京帝国大学文科大学講師、ついで学習院講師となり、のち学習院教授に昇進。大正十年(一九二二)三月、真宗大谷大学教授となり京都に移った。同大学内にイースタン・ブディスト・ソサエティ(東方仏教徒協会)を設立し、英文雑誌『イースタン・ブディスト』を創刊。昭和二十年(一九四五)十二月、鎌倉東慶寺内に財団法人松ヶ岡文庫設立。同文庫においても昭和二十一年(一九四六)英文雑誌『カルチュラル・イースト』を創刊。昭和二十五年(一九五〇)二

月より昭和三十三年(一九五八)十一月まで在米、ハワイ、クレアモント、イェール、ハーバード、コーネル、プリンストン、コロンビア、シカゴなどの各大学にあつて仏教哲学を講ずる。昭和二十四年(一九四九)一月日本学士院会員となり、十一月文化勲章を、昭和三十年(一九五五)一月朝日文化賞を受ける。昭和三十四年(一九五九)八月、ハワイ大学より名誉学位(法学博士)を受け、昭和三十九年(一九六四)四月、インドアジア協会より第一回タゴール生誕百年賞を受ける。主著として英文著作三十余冊、和文の著書百二十余冊を残したことは有名。和文著作『鈴木大拙全集』全三十二巻(岩波書店)がある。英文の名著に『Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture』(『禅と日本文化』)、『Satori Zen and Japanese Culture』(改訂)、『Essays in Zen Buddhism』三巻など数々があり、禅をZENとして世界に定着させた功績は大きい。また晩年の労作に親鸞の『教行信証』の英訳がある。昭和四十一年(一九六六)七月十二日没。九十五歳。法名は也風流庵大拙居士。遺骨は神奈川県鎌倉市の東慶寺墓地、金沢市野田山の鈴木家墓地、高野山奥ノ院墓地に三分して埋葬された。

秋月龍珉『鈴木大拙の言葉と思想』(講談社現代新書)講談社
昭和四十二年(一九六七)一月)

秋月龍珉『世界の禪者 鈴木大拙の生涯』(岩波同時代ライブラリー)岩波書店 平成四年(一九九二)十一月)

秋月龍珉『鈴木大拙』(講談社学術文庫)講談社 平成十六年(二〇〇四)四月)

浅見洋編『鈴木大拙と日本文化』(朝文社 平成二十二年(二〇一〇)六月)

上田閑照・岡村美穂子編『鈴木大拙とは誰か』(岩波現代文庫)岩波書店 平成十四年(二〇〇二)三月)

上田閑照・岡村美穂子編『相貌と風貌 鈴木大拙写真集』(禅文化研究所 平成十七年(二〇〇五)十一月)

大熊玄『鈴木大拙の言葉』(朝文社 平成二十一年(二〇〇九)十二月)

岡村美穂子・上田閑照編『思い出の小箱から 鈴木大拙のこと』(灯影撰書)二九 灯影舎 平成九年(一九九七)四月)

志村武『鈴木大拙随聞記』(日本放送出版協会 昭和四十二年(一九六七))

竹村牧男・西田幾多郎と鈴木大拙 その魂の交流に聴く』(大東出版社 平成十六年(二〇〇四)十二月)

岡村美穂子・上田閑照編『大拙の風景 鈴木大拙とは誰か』(灯影撰書)三〇 灯影舎 平成十一年(一九九九)六月)

西村惠信編『西田幾多郎宛 鈴木大拙書簡 億劫相別れて須臾も離れず』(岩波書店 平成十六年(二〇〇四)八月)

西谷啓治編『回想鈴木大拙』(春秋社 昭和五十年(一九七五))
久松真一・山口益・古田紹欽編『鈴木大拙 人と思想』(岩波書店 昭和四十六年(一九七二))

松ヶ岡文庫編『鈴木大拙』(道の手帖)河出書房新社 平成十八年(二〇〇六)五月)

古田紹欽『鈴木大拙 その人とその思想』(春秋社 平成五年(一九九三)六月)

古田紹欽編『鈴木大拙の人と学問 鈴木大拙禅選集・別巻』(新

装版 春秋社 平成十三年(二〇〇二)七月)

古田紹欽編 『鈴木大拙坐談集』全五卷(読売新聞社 昭和四十六―四十七年(一九七二―一九七三))

北国新聞社編集部編『禪』四 鈴木大拙没後40年』(時鐘舎

新書)時鐘舎 平成十八年(二〇〇六)十一月)

森清『大拙と幾多郎』(岩波現代文庫)岩波書店 平成二十三年(二〇一一)一月)

『鈴木大拙全集』全三十二卷(岩波書店 昭和四十三―四十六年(一九六八―一九七二))

附記 引用に際し、旧字は適宜新字に改めた。

附記 本稿は、科研費・基盤研究(C)(233531235)の研究成果の一部である。